

社会的事象の見方・考え方を働かせる小学校社会科授業 —「くらぶくりの残る川越市」の実践を振り返る—

埼玉大学 山口 美保

1. はじめに

現在社会は、グローバル化の進展やAIの飛躍的な進化、急激な少子高齢化などにより、社会構造や職業観が大きく変化しており、予測困難な時代を迎えているという。AIの進化に伴うシンギュラリティについて、新井は、「シンギュラリティは到来しない、それは、私たち人間の出番はまだたくさんあることを意味している。AIに代替されない人材とは、意味を理解する能力を持っていることである」と著書の中で述べている。¹⁾ 教師がAIに代替されない職業であり続けるためには、子どもたちに意味を理解する能力を育てなければならない。

平成28年12月の中央教育審議会答申においては、「予測不可能な時代に主体的に関わり、よりよい社会をつくっていくためにも、今まで以上に学校教育において知・徳・体にわたる『生きる力』をはぐくむ」ことが重視され、「何を学ぶのか」という学ぶ意義を共有しながら、育成を目指す資質・能力が明確化された。持続可能な社会の形成者となるためにも「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）の推進が必須であると考えられている。新井の述べた「意味を理解する能力」にもつながる、社会科教育において目指す資質・能力は、従来から「公民的資質の基礎を養う」ことを目指し、問題解決的な学習を大事にしてきた社会科指導においては、既に「主体的・対話的で深い学び」と言える不易な教育実践が少なくないとする。しかし、やみくもに授業改善を進めようとアクティブ・ラーニングの視点に立つことを忘れ、思考ツールだけに頼ったり、何のために行う言語活動なのか目的と手段を混同したりする授業実践が中にはある。社会科指導における「不易」と「流行」をしっかりと捉えることが改めて必要だと考える。

2. 研究の目的

筆者は、現行の学習指導要領が全面実施となった平成23年度2月に第4学年「くらぶくりが残る川越市」の授業実践を行った。これは、各学年の能力に関する目標において「考えたことを表現すること」を一層重視したこと、²⁾ 「実際の授業では、問題解決的な学習などを一層充実させることや、観察・調査や資料活用を通して必要な情報を入手し的確に記録する学習、それらを比較・関連付け・総合しながら再構成する学習、考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めて行く学習など言語活動の充実を図ることを求めている。」と明記されたこと、さらに、中学年の内容に新たに「自然環境、伝統や文化などの地域資源を保護・活用している地域」が加えられたことを受けて、教材化したものであった。本授業実践における主な成果は、①地域の人の働きに着目した地域教材の開発は子どもたちの主体的な社会参画への資質・能力の基礎を培うということ、②「人・もの・こと」に大切にしたい言語活動は社会的事象のもつ意味を考えるのに有効であったという2点である。

そこで、本稿では、筆者の過去の授業実践を基に、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編（以下、「新指導要領」と表記）において明示された小学校社会科において育成を目指す資質・能力を中心に再考察したいと考える。

3. 研究の方法

- (1) 資質・能力等について、小学校学習指導要領実施状況調査の結果及び新学習指導要領の記述から整理する。
- (2) 実践事例の成果と課題を資質・能力等の面から分析する。

4. 新学習指導要領等における資質・能力等についての整理

(1)平成 24・25 年度小学校学習指導要領実施状況調査（社会）

新学習指導要領改訂のためのデータ等を目的に

実施された上記調査の結果は、全国的な調査が少ない社会科にとって大変貴重であると考えられる。上記調査におけるペーパーテスト調査結果から、資質・能力に関する成果や課題を、以下の表 1 に示す。³⁾

【表 1】「ペーパーテスト調査結果の概要（社会）今回の改訂の基本的な考え方に関する事項等」

(1)思考力・判断力・表現力の育成	
相当数の児童ができている（おおむね80%以上）	課題があると考えられる（おおむね60%未満）
○示された学習問題の解決を見通して、調べる事柄や資料を選ぶこと ○文化遺産（有形・無形）の保存や継承の意義を考え表現すること	△資料から読み取った情報を、比較したり、相互に関連付けたり、総合したりして、社会的事象の働きや役割などを考え表現すること
(2)よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎の育成	
よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎に関する「社会的事象の関心」については、	
「我が国と外国との関係」への関心は他の調査事項*と比べて高いが、	「我が国の政治」、「我が国の水産業」への関心は他の調査事項*と比べて低い。
※他の調査項目…「昔の人々の暮らし」「地域行事や活動への参加」「我が国の農業」「我が国の伝統や文化」	

本調査により、「設定されている場面例から問題を見だし疑問文で表現すること」、二つの資料（グラフや写真）から相違点や共通点を見だし、その「社会的事象の特徴や働きを表現すること」、「資料から読み取った情報を相互に関連付けて、社会的事象が成立する条件などを考え表現すること」などの課題が見られたという。

これらの結果から、1つめとして、問題解決的な学習の展開する上で「学習問題を立てる」過程において教師が一方的に学習問題を提示することで学習が進められてる、あるいは一人ひとりに学習への問いをもたせる時間が十分に確保されていないという実態が推察される。

2つめとしては、社会科の授業が、資料から読み取ったことの一問一答に終始し、読みとったことからどのようなことが言えるのか、まとめていこうと何が分かるかという表現活動が不十分であることが推察される。思考力・判断力・表現力は、平成 23 年度から全面実施された現行の学習指導要領から示された資質・能力である。思考力は個別に存在するものではなく、思考力・判断力・表現力が一体となって問題解決に必要な力となっていると考えられている。小原は、思考力はそもそも判断力・表現力と一体となり、「社会的事象や問題を『読み解く力』と考えられる」と述べてい

る。⁴⁾ 考えたこと（思考・判断）を表現するということは、ただ単に資料から読み取ったことを表現させることとは異なることを現場の教師が一層意識し、問題解決的な社会科授業の充実を図る必要を感じる。

(2)新学習指導要領における資質・能力等

新指導要領 2 社会科改訂の趣旨及び要点

(1)改訂の趣旨⁵⁾の中で、「社会との関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を位置付けた学習過程を工夫し、『主体的・対話的で深い学び』を実現するよう授業改善を図ることや、小・中学校の社会科の内容を枠組みや対象に区分して整理したり、『社会的な見方・考え方』と概念等に関する知識との関係などを整理したりして、学習指導要領に示していくこと、教育環境の充実のための条件整備を図ることを求めている。」と中央教育審議会答申における改善の基本方針をまとめている。その特色は、大きく3点ある。

①育成を目指す資質・能力の明確化

教科という枠組みを越え、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱から捉え直している。社会科においても、高等学校地理歴史科、公民科において育成される（広い視野に立ち、グローバル化す

る国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の優位な形成者に必要な) 公民としての資質・能力の基礎を小・中学校社会科において育成するというスタンスで明確化されていることは今までとの大きな違いである。

②「見方・考え方」を働かせた「深い学び」

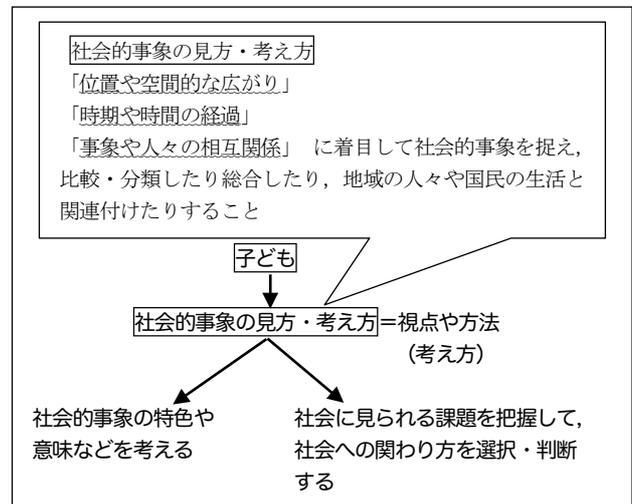
『社会的な見方・考え方』を働かせる」社会科授業は、これまでにおいても無意識的にはあるが行われてきていると言えよう。

「社会的な見方・考え方」は社会科の特質に応じた学び方を示すものとして、新指導要領に整理されている。「主体的・対話的で深い学び」が実現するような授業改善を図る上で、小学校社会科において「社会的な見方・考え方」を子どもが「働かせる」ことは非常に大切であると考えられる。それと同時に、教師が「社会的な見方・考え方」を「働かせる」ことができる授業を意識的に仕組むことが重要である。まさに、老子の言葉「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えよ」となる授業が求められている。

新学習指導要領においても、「見方・考え方」は、「資質・能力全体に関わるものであると考えられる」と記載されている。中学校への接続・発展を視野に入れて、①地理的環境と人々の生活、②歴史と人々の生活、③現代社会の仕組みや働きと人々の生活、の三つにそれぞれ内容を区分するとともに、小・中学校社会科における内容の枠組みと対象⁶⁾に加えて、この「社会的な見方・考え方」が、中学校社会科の各分野にも発展し、鍛えられていくものであることを、小学校教員は一層自覚し、視点や方法に基づいた問いを意識する必要がある。なぜなら、今回改訂された内容の構成と併せ、これまで小学校教員が社会科全体における位置付けや中学校社会科との連携を意識しないで指導に当たってきたという課題があるからだ。

澤井は、「主体的・対話的で深い学びのための視点も、深い学びの鍵となる『見方・考え方』を

働かせるようにする授業改善の視点も、単元などの授業のまとまりを見据えて考えていくことが大切である」と述べている。⁷⁾新学習指導要領では、小学校社会科の教科目標及び各学年の目標は「社会的な(社会的な事象の)見方・考え方を働かせ、課題(学習の問題)を追究したり解決したり(追究・解決する)*する活動を通して～」と改められている。この目標は、社会的な事象の見方・考え方を働かせた問題解決的な学習が、単元全体を見通してしっかりと行われなければならないことを示していると考えられる。そして、「社会との関わりを意識して学習の問題を追究・解決する学習の充実」こそが、深い学びにつながると考えられる。※()内は小学校社会科の表記



【図1】社会的な事象の見方・考え方のイメージ

③公民としての資質・能力の基礎

社会科、地理歴史科、公民科において育成する資質・能力は、三つの柱に整理し直す観点から「公民としての資質・能力」とされ、小学校社会科においては小学校社会科の目標(1)~(3)までに示す資質・能力の全てが結び付いて育まれるものであるという。⁸⁾「公民としての資質・能力の基礎」は、三つの柱全てと密接であるが、あえて特筆すべきを表2のようにまとめた。

【表2】公民としての資質・能力の基礎

知識及び技能	思考力, 判断力, 表現力等	学びに向かう力, 人間性等
・社会生活や国家及び社会について総合的に理解することを通	・社会的な事象の特色や相互の関連, 意味を多角的に考える ・「多角的に考える」…複数の立場や意見を踏まえて	・よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度 ・「多角的な思考や理解を通して」

して、公民としての 資質・能力の基礎を 育成する	考えること ・「社会に見られる課題」…学習内容との関連を重視し、学習展開の中で児童が出合う社会的事象を通して課題を把握できるようにすること ・「解決に向けて」…選択・判断の方向であり、よりよい社会を考えることができるようにすること	涵養される自覚や愛情
--------------------------------	---	------------

繰り返しになるが、子どもたちに「社会的事象の見方・考え方」を働かせるためにどのような授業が必要なのか、「公民としての資質・能力の基礎」を育成するための授業を教師は、これまで以上に意図的につくらなければならない。

5. 第4学年「くらづくりの残る川越市」の実践の概要

(1)教材について

本小単元では、埼玉県には川越のように、歴史的な景観や年中行事を地域の資源として、保護・活用しながら、互いに協力して地域の活性化に努め、特色あるまちづくりや観光などの産業の発展に努めている地域があることが分かるようにする。そのために、地域の人への聞き取りや副読本の資料など各種の資料を活用させ、地域の人々がそれぞれ工夫や努力をし、他のコミュニティや行政と互いに協力しながら、くらづくりを生かした町づくりを行っていることに気付くようにする。

川越は、江戸時代、新河岸川を利用した江戸との舟運により、商人の町として栄え、「小江戸」と呼ばれ、江戸文化を今に残す城下町である。明

治の大火をきっかけに、商人たちは、防火建築に優れた蔵造りの店舗を次々に建て、蔵造りの町並みが形成された。しかし、戦後、川越駅のある市の南部に商業の中心が移転したことや車社会の発達に伴い、一番街周辺の商店に活気が失われ商売を止めたり、代々受け継いできた蔵は、「古い、暗い、住みづらい」印象があり、取り壊したりするようになった。それに対し、1970年代より商店街を始めとする市民が建物を保存する活動に取り組んできた。次いで市が歴史的な建造物の調査をしたり、文化財に指定したりしてきた。さらに、地域の人々が、蔵を生かすことを話し合ったり、街並みに対する自主規制である「町づくり規範」をまとめたりしてきた。また、建造物の保存だけでなく、鋸鍛冶などの職人文化や川越祭りを中心としたお囃子の継承や振興をするなど、地域・行政が一体となって、地域に残る文化財を総合的に活用する地域づくりを行っている。

また、小・中学校社会科における内容の枠組みからみると、本小単元は、中学校地理的分野C(1)地域調査の手法、C(4)地域の在り方の学習とつながる学習である。

<川越のまちづくりにおけるそれぞれの役割など>

(記述は平成23年12月当時のもの)

<p>蔵の会…1983年発足。会員数は、4名からスタートし、現在約200名。商店街の商店主、研究者・建築家、主婦、行政職員など市内外の「川越ファン」で構成される。住民が主体となったまちづくり、活性化により景観保存などを目的とする。コミュニティ構想から始まり、活性化に向けての行動を重ねてきた。蔵の会理事・事務局長の野本吉憲さんは、「商業が繁盛してこそ蔵造りの町並みが活性化される。まちの人を巻き込んで、刺激を与えるコンサルティング的な組織でもある。また、庭師さんにも活躍してもらってお茶会や全国削ろう会川越大会といった職人イベントを開催したり、土壁塗りの体験などのワークショップを行ったり、子どもたちを巻き込みながら「時の灯のイベント」をしたりと文化的な意識を大切にしたい会である。」と語る。2002年よりNPO法人。</p>
<p>一番街商業協同組合…札の辻から仲町交差点までの430メートルに渡る蔵造りの町並みが残る商店街の協同組合。一番街商店街理事長の可児一男さんは、初代蔵の会会長であり、町並み委員会委員長を務めている。</p>

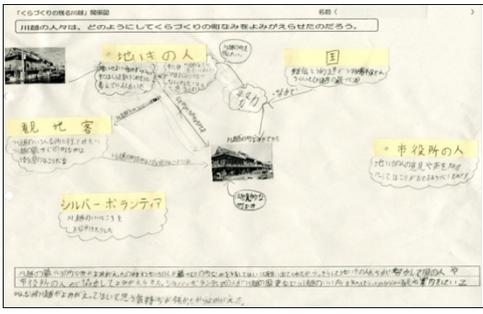
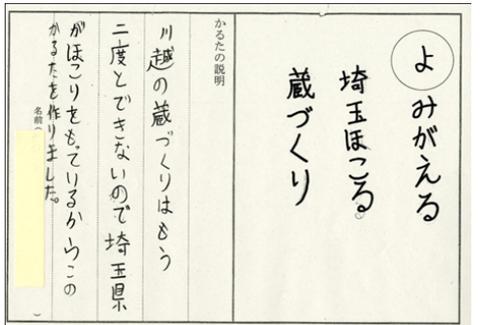
- 地域の人たちの取組について、ゲストチャー（町づくり委員会の可児さん・蔵の会の野本さん）の話聞く。
 - 教師が事前に聞き取り調査した地域の人や市役所、シルバーボランティアの人の話を活用し、これからの町づくりについて調べる。
- <まとめる・生かす②>

- 「町なみ保ぞん関係図」をつくり、学習問題に対する自分のまとめを書く。
- 蔵づくりの町川越PRかるたをつくる。

(3)抽出児童の姿

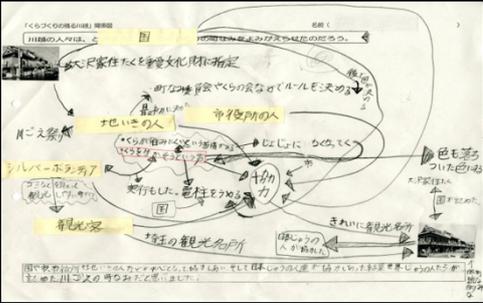
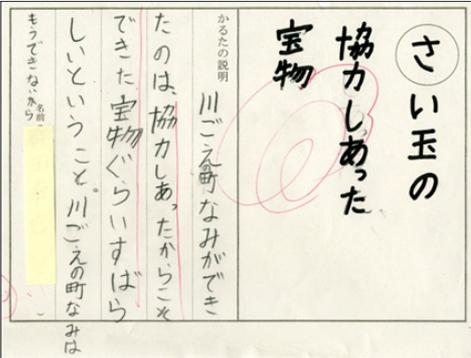
A児, B児 2名の抽出児童の小单元における思考の流れを学習感想, 関係図, PRかるたの記述を基に表4・表5にまとめる。

【表4】A児の小单元における思考の流れ

	A児の学習感想や作品	
1 学習感想	ほとんどの人の予想が昔からあったものや、今ではめずらしいものに関係していると思いました。予想で工夫と書いたけど、それは、何の工夫なのかをもっと調べたいです。	
2	欠席	
3 学習感想	地いきの人だけじゃなかったのは、他の人の意見も聞けて「こういうのがいい」とか聞けるからだと思います。このままくらづくりを残してほしいと言わなければ、今の川越はないので勉強もできなかったと思うと、可児さんや野本さんたちはすごく川越のまちが好きなんだと思いました。	
4 学習感想	自分たちで守るというのは、本当に大切にしているということがわかった。みんながさんせいしてくれたから、今の町なみができたのはすごいと思う。町づくり=チームワークは、本当に大切だと思った。イベントなどで、川越の人の努力や知えがわかるようなイベントをしていることはすごいと思う。	
5 学習感想	地いきの人やシルバーボランティアの人などが思っていることはいっしょでたくさんの人々に歴史や文化などの川越のよさを知ってほしいと思っていて、そのために自分たちでくふうしたり市役所の人や町なみ委員会の人などに相談したりしているのだと思います。	
6・7 関係図づくり		<p>まとめ：</p> <p>川越の蔵づくりの町なみがよみがえったのは、まず、地いきの人が蔵づくりの町なみを残してほしいと願い出たから。そして、地いきの人達が努力して国の人や市役所の人が協力してよみがえらせた。シルバーボランティアの人が川越の歴史など川越のよいところを知ってもらうため自分から観光案内をしている。みんながよみがえってほしいという気持ちが強かったからよみがえった。</p>
8 かるたづくり		

【表5】B児の小单元における思考の流れ

時	B児の学習感想や作品
1	古い町なみがあって、めずらしいから 600 万人も来ると考えた。社会科見学に行ったときも、さいたま市とちがうと思いました。だから、風景がちがうと考えました。
2	川越の観光客が増えたのは、何かが関係しているのか不思議な感じ。

3	川越の町なみは、みんな協力してできています。国も認めるくらいすごい文化なことがわかった。町なみを守るためにいろいろな会がある。
4	信号（交差点名表示）などの色が（そのままだと）落ち着いた色じゃないから、黒ということがわかった。それぞれルールがあることが分かった。くらは二度と作れない家ということが分かった。
5	川越のよさに気付いてほしい目的で、くらの会や町なみ委員会があることがわかった。川越の町が不便にならなくて、昔の町なみを守っていくところがすごいと思った。観光客にも便利なお店がある。外国人にもわかりやすい町をつくっている。
6 ・ 7	 <p>まとめ： 国や市役所、地いきの人などが中心となって、協力し合い、そして日本中の人が協力しあった結果、世界中の人たちが認めた蔵づくりの町なみだと思いました。</p>
8	

6. 児童の姿を基にした資質・能力の面からの分析

どのような社会的な見方・考え方を働かせる授業が展開されたのか、その際に、どのような問いを共有しながら児童が学習していたのかを分析した。

時	分析
1	<ul style="list-style-type: none"> 導入で県内の6枚の写真を提示し、いろいろなまちがあったことを想起させる活動は、自分たちの住む市との違いを基に比較しながら、<u>分布、地域などを問う視点</u>につながった。（空間的な見方・考え方：埼玉県にはどのようなまちがあるのだろう。） グラフから、川越にたくさんの人々が集まってくる理由を予想する活動では、<u>変化などを問う視点</u>を与えることができた。（時間的な見方・考え方：なぜ、川越市に観光に来る人が増えたのだろう。）
2	<ul style="list-style-type: none"> <u>変化などを問う視点</u>をもたせるために、約25年前の様子と今の様子の定点写真を比べさせた。（時間的な見方・考え方：違うところはどこだろう。同じところはどこだろう。）「町がきれいに生まれ変わっている。観光客が3倍に増えているなんて、この25年の間に何があったのかな。」と疑問をもつと同時に、「まちを変えるのは1人では無理だと思う。関係している人たちがいそうだ。」などの発言やつぶやきがあった。それらの発言を基に学習問題がスムーズに立てられた。どのようなつながりがあるかなど工夫、関わり、協力などを問う視点を自ずと働かせることができていた。（相互関係的な見方・考え方：川越の人々は、どのようにして蔵造りの町並みをよみがえらせたのだろう。） 第2時の段階では、B児のように、社会的事象の見方や考え方が整理されている訳ではなく、かなり漠然と捉えている児童も少なくない。
3	<ul style="list-style-type: none"> まず、主な資料「蔵のまち川越のうつりかわり年表」の読み取りにより、児童は地域の人々、国や市との

	<p>協力によってまちづくりが行われた社会的事実を知識として得た。加えて、教師がインタビュー取材を行ったことを基にした自作文章資料1～3「地域の人（町なみ委員会、蔵の会）の方の話」を補助資料として提示した。補助資料の読み取りを通して、立場の異なる人々が協力してまちづくりを行ったことについて実感をもって理解することができた。言い換えると、本時は、町なみ保存をめぐる社会に見られる課題を知り、どのようなつながりがあるか、関わり、協力などを問う視点を働かせながら、小単元を通してはぐくむ思考力・判断力といった能力の基礎となる時間である。（相互関係的な見方・考え方：地域の人には、どのような人がいるのだろうか。地域の人たちは蔵造りの町並みを生かすためにどのような取組をしているのだろうか。）</p>
4	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲストティーチャーとして、町なみ委員会・蔵の会の代表2名の方を教室に迎え、自作資料4「蔵づくりのまちを大切にすまじり」について、児童は、自分事として捉えながらきまじりの策定理由を考えたり（空間的な見方・考え方：地域の人々は、何のためにそれぞれのきまじりをつくったのだろうか。）、当事者であるゲストティーチャーの2人から町なみ保存への思いを直接伺ったりした。特に、A児の「本当に大切」「チームワーク」などの言葉からは、工夫、関わり、協力などを問う視点を十分に働かせながら表現していると言えよう。（相互関係的な見方・考え方：町並み保存のためになぜこのような協力が必要なのだろうか。） ・B児については、人々の工夫や協力があつたことは理解したが、やや断片的な知識であり、相互の関係についてはまだイメージしきれてはいないようである。
5	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の自作資料5・6を基に、これからの町づくりについて調べた。（時間的な見方・考え方：川越の人々は、これからどのようなまちづくりを目指しているのだろうか。） ・前時までの地域の人（蔵の会）の話に加え、シルバーボランティアや市役所の人々の話の文章資料を調べることで、児童はそれらの異なる立場の人々の町づくりへの思いや願いに気が付くことができた。（相互関係的な見方・考え方：地域の人々はどのような願いをもっているのだろうか。） ・A児、B児とも、「川越の『よさ』を知ってほしい」というキーワードを書いている。A児は、シルバーボランティアの言葉に特に着目しているのに対し、B児は蔵の会とシルバーボランティアに共通している思いであることに着目し、前時の学習で扱った町なみ委員会の人と同じではないかと推察したようである。さらに、B児は外国の人を含めた観光客の視点に立った町づくりを推進しようとしていることに気付いた。
6 ・ 7	<ul style="list-style-type: none"> ・児童は、第1～5時までに、時間、空間、相互関係などの視点に着目して、「蔵づくりの残る川越市」に関する知識を習得した。第6・7時では、関係図づくりを通して、それらを比較・関連付けなどをして再構成しながら、伝統や文化の保存や継承に関する概念的知識を獲得していった。（相互関係的な見方・考え方：今まで調べてきた様々な立場の人が行ってきた取組や願いはどのようにまとめられるだろうか。） ・A児は、地域の人々の努力と国や市の協力に加え、シルバーボランティアを含めた「みんなが、よみがえってほしいという気持ち」の強さに着目した。 ・B児は、国、市役所、地域の人などの「協力」をキーワードに図と文章をまとめている。一方で、第5時の学習でB児が目にした「外国の人」という言葉に影響され、「日本中の人協力し、世界中の人が認めた」とやや考えが飛躍してしまった。1つひとつの社会的事象から得た知識をきちんと押さえる必要がある。
8	<ul style="list-style-type: none"> ・小単元のまとめとして、「蔵づくりの町川越PRかるた」をつくる表現活動を行った。このかるたづくりからは、「多角的な思考や理解を通して」涵養される地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚といった学びに向かう力、人間性等が表れている。 ・A児は、「埼玉ほこる蔵づくり」であるとまとめている。地域の伝統や文化を守るために、地域の人々が互いに協力して町づくりを行ってきたことを理解し、地域への誇りをもつことができたといえる。 ・B児は、「埼玉の協力し合った宝物」とまとめており、地域への強い愛着をもつことができたことがうかがえる。

7. 成果と課題

(1)成果

○「川越の人々はどのようにして蔵づくりの町なみをよみがえらせたのだろう。」という学習問題について小単元を通して追究することができた。特に、「調べる」過程において意図的に様々な立場の人に資料や実際の出会いを通して関わらせたことは、相互関係的な見方・考え方を働かせて異なる立場から多角的に考えることで、「川越では県や市、地域住民など様々な組織、機関、人々の協力により、蔵造りの残るまちづくりを進めている」という概念的知識を獲得することにつながった。

○小単元の前半で身に付けた「見方・考え方」を生かし、それらに関係付けながら、関係図やかるたづくりという表現活動を行ったことで、一人ひとりの相互関係的な見方・考え方が深まり、「協力」というのはどういうことなのか、学習問題の答えとして自分の言葉で述べるとともに、地域社会に対する誇りや愛情をもつことができた。

(2)課題

▽本稿で扱った過去の実践は「時間的・空間的・相互関係」といった「深い学び」の鍵となる見方・考え方を比較的働かせやすい小単元であったといえよう。新学習指導要領において新たに扱う「市の様子の移り変わり」、「自然災害から人々を守る活動」、「我が国の産業と情報との関わり」などの小単元においては特に、どのような3つの柱をはぐくむのか、そのためにどのような見方・考え方を働かせ「深い学び」へ導いていくのか研究が必須である。

8. 終わりに

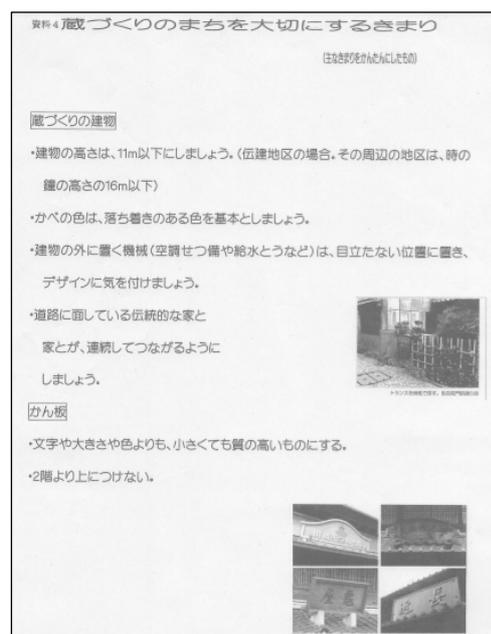
森分(1978)は、「社会科の授業は、社会を認識させることを目的とし、社会を認識させる過程として構成される」と述べている。⁹⁾「社会科の授業をするとき教師は、意識すると否とにかかわらず社会の一定の認識のし方を子どもに教えている」という。人生100年時代が到来し、ますます予測困難なこれからの時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力をはぐくむためには、問題解決的な学習を大切にしてきた社会科が果たす役割は大きい。

総則と常にセットで考えながら、教科横断的に

はぐくむ資質・能力と社会科において育てる資質・能力を考えなければいけない。だからこそ、「問い」を大切にした問題解決的な学習を充実させること、そのためには何に気付かせ、何を考えるための資料が必要かというまさに「社会科は資料が命」であることなど「不易」の部分に疎かにせず、教師は自身の社会科授業が、社会的事象の見方・考え方を働かせ、「深い学び」となっているか意識しながら授業を行う「流行」の部分も併せもたなければならない。小学校社会科においても子どもたち一人ひとりの資質・能力をしっかりとはぐくむことが一層求められる。



【資料1～3「地域の人(町なみ委員会・蔵の会)〇〇さんの話」】



【自作資料4「蔵づくりのまちを大切にすきまり」】



【資料5「地域の人(蔵の会)〇〇さんの話」】

【資料6「市役所の人 〇〇さんの話」】

【資料7「シルバーボランティアの人 〇〇さんの話」】

【引用文献】

- (1)新井紀子『A I vs. 教科書が読めない子どもたち』(東洋経済, 2018年)
- (2)文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』(東洋館出版, 2008年) p.5
- (3)国立教育政策研究所『平成24・25年度小学校学習指導要領実施状況調査報告書』(2018年)
- (4)小原友行『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン小学校編』(明治図書, 2009年)
- (5)文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編』(日本文教出版, 2018年) pp.5-9
- (6)同上書, p.10, pp.150-151
- (7)澤井陽介・加藤寿朗『「見方・考え方」・社会科編』(東洋館出版, 2017年)
- (8)前掲書(5), pp.20-21
- (9)森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』(明治図書, 1978年) p.40

【参考文献】

- ・川越市都市計画部都市景観課『伝建地区の概要』(2011年)
- ・川越市都市計画部都市景観課『かわごえ都市景

観表彰』(2010年)

- ・川越市都市計画部都市景観課『都市景観重要建築物』(2010年)
- ・川越市都市計画部都市景観課『川越市川越伝統的建造物群保存地区 創作看板』(2011年)
- ・川越市建設部街路課『歴みち』(2008年)
- ・川越市都市計画部都市景観課『十カ町の町並み景観を守り育てる』(2009年)
- ・川越町並み委員会・川越市『現代に生きる歴史のムーブメント』(2011年)
- ・スカイマークエアラインズ『SKYMARK 2012JANUARY』「特集1 埼玉蔵造りの町 小江戸川越散歩」(2012年)
- ・全国伝統的建造物群保存地区協議会『伝統的建造物群保存地区 歴史の町並 平成23年度(2011)版(2011年)
- ・川越一番街商業(協)町並み委員会『町並み委員会20周年 20YEARS』(2007年)
- ・株式会社INAX『Esplanade 魅力ある街づくり No.50』「特集 住民の主体性を取り込んだまちづくり 埼玉県川越市」(1999年)
- ・川越市観光課「川越市入込観光客数の推移」(川越市ホームページ最終更新日2018年3月2日)